

一人暮らし高齢者の生活を支える コミュニティに関する研究

—「M独居老人給食会」を事例として (1)—

A Study on the Community Supporting Life of Living-alone Elderly People

—A Case Study on “M Living-alone Elderly People’s Luncheon”(1)—

加藤玲子*, 古川恵子*, 本間俊雄**

Reiko Kato, Keiko Furukawa and Toshio Honma

*鹿児島女子短期大学 **鹿児島大学

Key words : 一人暮らし高齢者, 給食会, コミュニティ

I. はじめに

総務省統計局の発表によると、平成22年10月1日現在の我が国の総人口は1億2805万6千人で、人口増加率は調査開始以来最低となっている。今後、総人口は加速度的に減少し、2055年には9,000万人を割り込むことが予測されている。

また、総人口に占める高齢化率は20.2%から23.1%に上昇し、5人に一人が高齢者という「本格的な高齢社会」を迎えている。

鹿児島県の総人口は1,706,242人で前回調査の平成17年に比べ46,937人減少（平成17年比2.7%減）している。高齢化率は平成17年比、1.7%増の26.5%（全国23%）で全国第12位である^{注1)}。

我が国における世帯の状況をみると、一般世帯数は調査開始以来、初めて5000万世帯を超え、その中で世帯員1人世帯が最も多い（一般世帯の31.2%）。

「一人暮らし65歳以上人口」は、高齢者人口の15.6%を占め、65歳以上女性の5人に1人が一人暮らし高齢者である。

鹿児島県における1人世帯は243,096世帯（一般世帯の33.4%）と多く、全国第3位である。

また、65歳以上人口に占める一人暮らし高齢者は22.8%（17年比6.1%増）となり、全国都道府県で最高となっている。そのうち一人暮らし男性高齢者は23,153人（17年比増加率20.1）で、増加率は15年前に比べほぼ倍（97.4%増）となった。

鹿児島県における人口構造と世帯の状況は、世帯人数が減少する一方^{注2)}で、高齢化率の上昇と高齢者の一人暮らし世帯が増加する傾向を示している。このような状況下で、一人暮らし高齢者が孤独感や不安を抱かずに住み慣れた地域で安心して過ごせるよう、地域の役割に期待するところは大きく、高齢者の徒歩圏に地域交流の場を設けることや住民の外出を促す等の地域づくりは必要なことのひとつである。なお、鹿児島市の町内会加入率は59.7%（中核都市37市、平均加入率76.9%）と低い^{注3)}。

Ⅱ. 研究の目的と方法

本研究は、一人暮らし高齢者に視点をあて、地域でのつながりや生活行動を調査・分析し、高齢化先進県である鹿児島県の地域コミュニティの在り方についての知見を得るものである。

鹿児島市で早期に造成された住宅団地において、昭和62年以来継続されている「M独居老人給食会」に参加している一人暮らし高齢者を対象に、各戸の訪問面接調査を行った。

Ⅲ. 調査の対象と概要

1. 調査対象地域、調査対象者

本調査対象地域の住宅団地は、昭和35年に土地区画整理事業における都市計画決定がなされ、工事概成が昭和41年度である。団地は1丁目から7丁目までで構成され、団地総人口は24,127人、高齢者数4,473人、高齢化率18.5%（平成23年3月）である。調査対象者の居住地区は、1丁目、2丁目、6丁目である。対象地区と鹿児島市の高齢化率を表に示す（表1）。

[1丁目]: M台地の南東部に位置し、市の中心部に近く、大学・公営住宅があり、隣接する2丁目土地区画整理事業に入るときにはすでに住宅が建っていた地区である。

[2丁目]: 幼稚園、小学校、公営住宅がある。今回の対象地区の中では、最も高齢化率が高い地区である。

[6丁目]: 給食事業の行われる福祉館がある地区で、福祉館の隣地には、テレビ放送局と公営住宅があり、また、医院やストア等の購買施設、飲食店が多数ある地区である。

表1 調査対象地区の人口と高齢化率

	総人口(人)	高齢者数(人)	高齢化率(%)
市全体	604,133	126,977	21.0
1丁目	3,771	791	21.0
2丁目	2,853	795	27.9
6丁目	3,630	651	17.9

予備調査を2011年7月に行い、本調査は、8月23日から9月7日まで行った。各戸を訪問面接し、聞き取りを行った。調査内容は、給食事業参加に関すること、外出状況、地域活動参加状況等である。

また、調査対象者は、「M独居老人給食会」に会員として登録している高齢者54人中、調査不能3人、拒否6人、現在は子と同居しており非該当となる2人を除く43人である。

2. 「M独居老人給食会」について

2-1. 設立の経緯

昭和60年頃から、地域住民の中で高齢者が多くなり、一人暮らし高齢者の交流を目的に、62年5月第1回「M独居老人給食会」が行われた。当時、交流の場の「ふれあいサロン」（平成6年、全国社会福祉協議会が、高齢者の仲間づくりを提案し地域に組織づくりを働きかけた）などもなかったため、会の目的を「会食を通して独り暮らし老人のふれあいの場をつくり、お互いの交流の輪を広げ孤独感の解消をはかる」として、スタートした。

給食会はM校区社会福祉協議会、高齢者クラブ連合会、民生委員協議会の協力で始まり、月1回の給食会は会場を鹿児島市M福祉館とし、運営は、地域住民ボランティアによる互助活動である。

2-2. 運営

「M独居老人給食会」の会員資格は、M

地域に居住する65歳以上の独居者である。

現在、参加者の最高年齢は93歳、平均年齢82.8歳である。

毎月の給食会は昭和62年から休むことなく続けられ、平成22年7月で344回を迎えた^{注4)}。月1回の給食会には、毎回68～76名の参加があり^{注5)}、材料調達のため、ボランティアが事前に電話等で参加人数を確認している。当日は「出席簿」を皆の前で読みあげ出席確認を行う。食事後は演芸(歌、楽器演奏)・講話・レクリエーション等が行われ、おしゃべりとともに楽しいひと時を過ごしている。

運営費は、給食会参加費(毎回1人300円)と、高齢者クラブ連合会からの年3万円、紫原校区社会福祉協議会からの年8万円の、年間合計11万円と、民生委員や給食会への招待客からの寄付金、福祉バザーの収益などで賄われている。出費は、会場費・光熱費として1回5,000～6,000円、食材費等であり、最近は当初の寄付金を取り崩して運営が行われている。

給食会の調理は、毎月10～13人のボランティアが、参加人数の把握、献立、買い物、調理、会場設営、洗い物等を行っている。ボランティアの多くは65歳以上で、設立当初からのボランティアには90歳もいる。平成17年からは、鹿児島女子短期大学生活科学科食物栄養学専攻の学生と教員が、ボランティアで会場設営、配膳、片づけ、調理(教員だけが参加)等に参加している。

IV. 調査結果と分析

1. 回答者の概要

1-1. 年齢と独居年数

回答者43人の年齢は73歳以上で、その93%が後期高齢者である。30%が独居年数20年以上である(表2)。

表2 回答者の概要

性別	(人)	独居年数	(人)
男	2人	3年未満	2
女	41人	5年未満	7
年齢(歳)	(人)	10年未満	4
65～69	0	20年未満	15
70～74	3	20年以上	13
75～79	10	無回答	2
80～84	19	20年以上の人の平均年数	34年
85～	11	配偶者	(人)
平均年齢	82.8歳	死亡	41
年齢幅	73～93歳	いない(結婚歴なし)	2

1-2. 住居形態

調査回答者の住居に関しては、表3のとおりである。全体の67.5%が集合住宅(公営住宅:県営、市営)居住者であり、借家居住者が約70%である。

表3 住居形態

住居形態	(人)	(%)
公営住宅	29	67.5
持家・戸建て	12	27.9
借家・戸建て	1	2.3
持家・アパート	1	2.3
合計	43	100.0

1-3. 医療・福祉に関する状況

通院の状況は表4のとおりで、88.4%が通院している。また、表5に示すように回答者の約42%の18人が介護認定を受けており、デイサービス利用者はその72.2%である(表6)。

表4 通院の状況 (単位:人)

している	38
していない	3
無回答	2
合計	43

表5 介護認定とその内容 (単位:人)

受けていない	24
受けている	18
要支援1	10
要支援(不明)	1
要支援2	2
要介護1	2
要介護2	3
無回答	1
合計	43

表6 介護保険のサービス利用状況

	利用者数 (人)	平均利用回数 (回)
デイサービス	13	1.6
ホームヘルパー	8	1.4
その他(訪問給食)	1	2

2. 「M独居老人給食会」に関する調査結果

2-1. 参加形態

回答者43名中、毎月参加者は39名で、参加年数5年以上10年未満が7名、10年以上が16名であり、半数以上の53%が5年以上参加者である。また、参加年数1年未満9名、3年未満8名である(図1)。高年齢者ほど毎月参加し、参加を楽しみにしていることが分る(表7)。

参加のきっかけは「会に参加している知人・友人の誘い」が最も多く(31名)、中には「寡婦会の人から教えられ」入会した者もいる。

M福祉会館への交通手段は徒歩30名、押し車4名、杖使用5名、車1名、その他3名でバスを利用する者はいない。押し車や杖使用の者も毎月参加している(表8)。

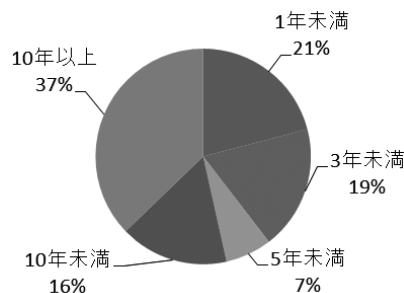


図1 給食会参加年数

表7 年齢階層と給食会参加頻度 (単位:人)

	毎月参加	時々参加	不明	計
70~74歳	3			3
75~79歳	8	2		10
80~84歳	17	1	1	19
85歳以上	11			11
計	39	3	1	43

表8 給食会参加手段と参加頻度 (単位:人)

	毎月参加	時々参加	不明	計
徒歩	28	2		30
自転車	1			1
車	1			1
杖使用	5			5
押し車	3	1		4
不明			2	2
計	38	3	2	43

2-2. 給食会の魅力

給食会参加の魅力については「美味しい」が多く(33名)、続いて「安い」「栄養」等と答えている(図2)。自由回答では「薄味で年寄向」「手づくり」「種類が豊富」「ごちそう」等の記述がある。給食会の特徴は、高齢者ならではの手づくり、昔ながらの味付け、季節料理等である。

一人暮らしでは弁当などを買いがちで、味付けが高齢者の口に合わない、また、つくるとしても食材は多くなく、簡素になりがちである。まさに、一人暮らしの高齢者には、懐かしい「ごちそう」なのであろう。

つくり手であるボランティアは、長年家

庭の中で食事作りを担ってきた。その経験が皆に喜ばれる、必要とされるボランティアとなっている。高齢でも、その経験を活かし、社会で必要とされることの意義は大きい。

もうひとつの魅力は、「知り合いに会うのが楽しみ」「おしゃべりの機会」であり、「顔見知りが出来るのがいい」「友達づくり」「顔が見られて嬉しい」「みんなと話すのが楽しい」「ありがたい」などの記述が多く、会の目的である「交流」が達成されている。また、少数であるが「なわばりがあり、気を遣う」「席が決まっていた話す機会がない」との意見もあった。

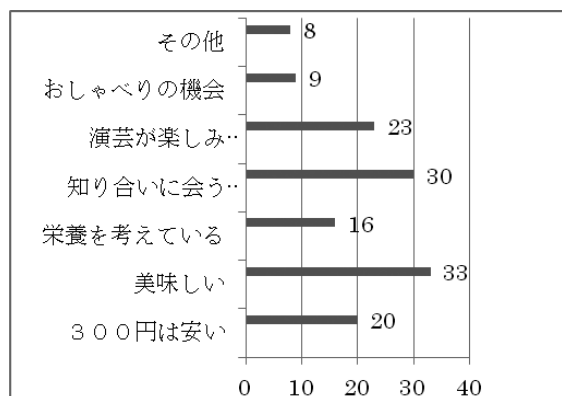


図2 給食会の魅力 (単位：人)

2-3. 給食会によるつきあいの広がり

給食会に参加したことで「知り合い、友人が増えたか」の問いには、43名中38名が「増えた」と答えている。しかし、「欠席者への電話や町などで見かけた時の安否確認」については「する」と答えた者は24名、「しない」と答えた者は19名であった(表9)。

また、給食会以外で、お茶をのんだり、おしゃべりをしたり、出かけたりするのは21名で、「買い物」「他の会合(お達者クラブ、老人会、おごじよ会、寺の世話)」「旅

行」等を挙げている。特に自由記述では、スーパー近くの公園で買い物前後のおしゃべりを挙げている。給食会だけのつきあいは22名である。

さらに、「欠席者への電話や町などで見かけた時の安否確認」を「する」と答えた24名全ての者は「知り合いが増えた」と答えている。

表9 給食会と友人・安否確認 (単位：人)

	安否確認する・された		計
	はい	いいえ	
食事会参加で友人が増えた			
はい	24	14	38
いいえ		5	5
計	24	19	43

2-4. まとめ

昭和62年「M独居老人給食会」が設立された時代背景には、昭和55年をピークに高齢者の子との同居率の減少と独居高齢者世帯の増加傾向がある。また、高齢者の自殺率も高く高齢者問題が社会的な関心となってきた時代でもあった。

そのような中、地域住民の主体的活動によって設立された「M独居老人給食会」は、交流を深め外出を促す、時流に先駆けた住民参加型コミュニティづくりであった。

参加者は、参加年数が増すごとに知り合い・友人が増え(1年未満参加者9名中知り合いが増えた者7名、5年未満3名中3名、10年以上16名中15名)、給食会以外でのつきあいも広がりを見せている。

75歳以上の高齢者は年齢とともに身体機能の低下傾向を示し外出行動が億劫になりがちだが、毎回給食会に参加していることは「参加すること」に大きなメリットがあると考えられる。高齢になる程に、兄弟や友人・知人との別れも増え、喪失感を覚える機会も多くなる。馴染みの関係である

「M独居老人給食会」で顔を見、語ることで、一人暮らしで、吐くこのできない悲しみや孤独が癒され、「ひとりではない」という、思いが感じ取れると推測される。

また、月1回の給食会の集いが、安否確認や買い物途中の公園での「おしゃべり」になり、交流が日常的に広がっていることが、自由記述の中に見られた。一人暮らしの日常は、時として、一日中だれとも話さないこともある。公園でのおしゃべりは、一日の中での変化にもなり、引きこもりを防ぎ、気分転換にもなる。さらに、公園はさまざまな情報交換と情報収集の場となり、時にはひとりでは理解が困難な介護保険等の情報整理の場ともなるであろう。

地域の公園が、交流と情報共有の場となっている。

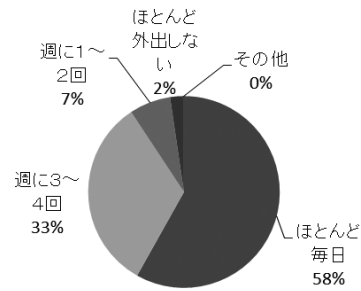


図3 外出頻度

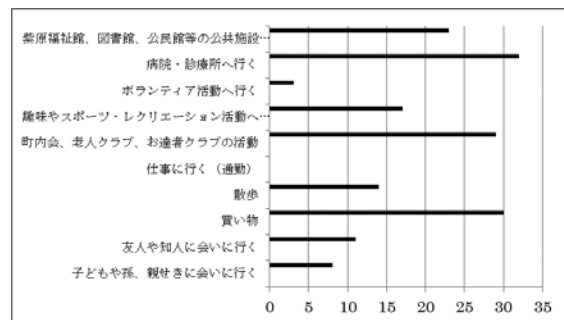


図4 外出目的 (単位:人)

3. 外出状況

3-1. 外出頻度と目的

日常生活での買い物や散歩等の外出頻度は、「ほとんど毎日」が58.1%、「週に3~4回」が32.6%で、合計約90%となる(図3)。

外出目的は、「病院・診療所へ行く」が31人(72.1%)と「買い物」29人(67.4%)が多く、「町内会、老人クラブ、お達者クラブの活動」も29人である。また、「地域福祉館等の公共施設に行く」も23人(53.5%)と多い。複数回答であるが、外出頻度が「ほとんど毎日」の人が多くことと関連があると考えられる(図4)。

3-2. 外出手段と、外出時困っていること

外出手段は、「徒歩」が21人(48.8%)、「杖や押し車を使って徒歩」の人が11人(25.6%)、「バス」が6人(14%)で、自家用車は少ない(表10)。また、外出時困っ

表10 外出手段

外出手段	(人)
1 徒歩	21
2 徒歩(杖、押し車、4輪歩行車の自助用具を使用)	12
3 車いす	0
4 自転車、バイク	1
5 自家用車(自分で運転)	1
6 自家用車(家族等が運転)	2
7 J R、バス等の公共機関	6
8 タクシーまたは福祉タクシー	0
9 その他	0

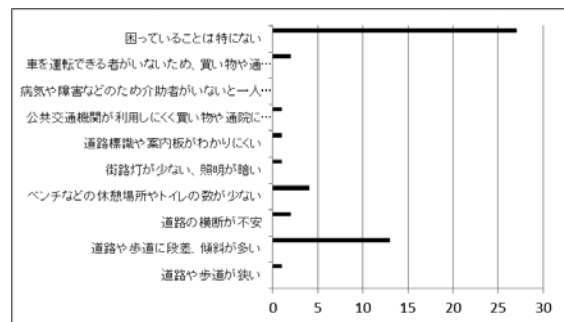


図5 外出時に困っていること (単位:人)

ていることは、「特にはない」が27人(62.8%)で最も多いが、続く「道路や歩道に段差、傾斜が多い」と回答した13人

(30.2%) については、回答者が73歳以上であること、対象地区が台地で坂道が多いことがその理由と考えられる^{注6) 注7)}。また、「ベンチなどの休憩所やトイレの数が少ない」4人(9.3%)、「車を運転できる者がいないため、買い物や通院に不便」2人(4.7%)、「道路の横断が不安」2人(4.7%)となっているが、地域の加齢が進行するに伴い、対応が必要である(図5)。

3-3. 通院

通院していると答えた人で、内科に通院している31人(72.1%)は後期高齢者で、そのうち地域内の近距離が最も多いが、眼科は、地域内には一軒しかなく、遠距離が最も多い。地域の徒歩圏内を近距離としたが、近距離であっても、道路が狭い・坂道である等の問題や、バス停までの道のりについての困難さは、今後の外出を阻む要因となる(表11)。

4. 地域活動参加状況

現在参加している団体や組織については、「老人クラブ」34人(79.1%)、「趣味、健康、スポーツ・レクリエーションのサークル・団体」が27人(62.8%)、「お達者クラブ」22人(51.2%)で、多くの人々が、社会参加をして活動的な生活をしているといえる(図6)。

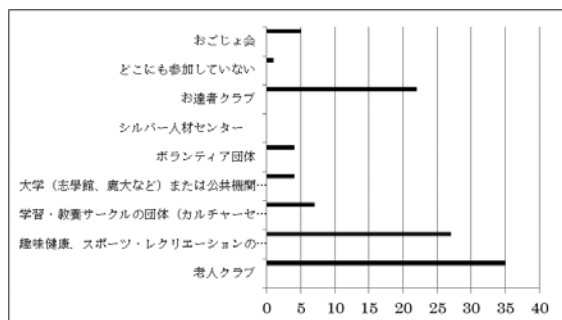


図6 参加組織・団体 (単位:人)

表11 通院状況

	通院距離	近距離	中距離	遠距離
内科	通院人数	21	3	7
	頻度	1/月: 10人	2/月: 2人	1/月: 5人
		1/週: 3人	1/週: 1人	1/週: 1人
		2/月: 2人		3/週: 1人
		2/週: 1人		(送迎付き)
	年齢(歳)			
	~75	1人		1人
76~80	5人	3人	4人	
81~85	8人		2人	
85~90	6人			
91~	1人			
眼科	通院人数	6	4	8
	頻度	1/月: 3人	1/月: 2人	1/月: 3人
		2/月: 1人	4/年: 2人	2/月: 1人
		2/年: 1人		2/年: 1人
		不明: 1人		不明: 1人
	年齢(歳)			
	~75		1人	1人
76~80	1人	2人	2人	
81~85	3人		2人	
85~90	2人		2人	
91~			1人	
整形外科・リハビリ関連	通院人数	7	5	1
	頻度	1/週: 2人	1/週: 2人	不明: 1人
		3/週: 1人	2/週: 1人	
		5/週: 1人	3/週: 1人	
		3/年: 1人	不明: 1人	
		4/年: 1人		
	不明: 1人			
年齢(歳)				
~75	1人			
76~80	1人		1人	
81~85	5人	4人		
85~90				
91~				
歯科・耳鼻咽喉科等	通院人数	5	3	4
	頻度	2/月: 1人	1/月: 1人	1/月: 3人
		1/年: 1人	2/週: 1人	4/年: 1人
		不明: 3人	不明: 1人	
	年齢(歳)			
	~75			1人
	76~80			
81~85	2人	1人	3人	
85~90	3人	2人		
91~				

※ 近距離: 住宅団地内の徒歩圏
 中距離: バスで約10分の距離
 遠距離: バスで約30分の距離

V. まとめ

一人暮らしの高齢者を対象とした「M独

居老人給食会」には、食事に参加する高齢者と、食事だけでなく、ボランティアで調理も行う高齢者がいることがわかった。このことは、会の運営は住民が主体であり、住民による互助活動が運営方針であることの実践であるといえる。

毎月徒歩で参加する高齢者がほとんどであるが、美味しい、安い、栄養を考えてあるなどの理由で給食会の評価が高い一方で、地域の人との交流と、つきあいの広がりにより大きな機能を果たしていることが確認できた。

また、給食会参加者の約半数は、一人暮らしというライフスタイルの共有によって成立し、お茶会や旅行などに発展して、人間関係の広がりへと繋がっている。

給食会は、一人暮らし高齢者にはなくてはならない、地域の繋がりを維持するものといえる。

一人暮らしの年数が20年以上の人が28人(65.1%)と集合住宅居住者が67.5%であることも、馴染みの関係の構築と、参加状況の把握を容易にさせ、給食会を盛んにしている要因ではないかと考えられる。給食会の欠席が、一人暮らしの高齢者への安否確認のきっかけにもなっている。

今後の給食会の課題として、参加者の増加への対応、ボランティアの確保、経費の確保等があり、手作りの食事の良さをどこまで維持できるかが挙げられる。

外出行動についてみると、給食会に徒歩で参加する人の中には足が不自由な人がある。会場近くのストアの入り口に置いてあるベンチや、公園のベンチが役に立っているという回答がある。単に休憩だけでなく、人との交流の場、情報交換の場になっていることから、その設置意義は大きいといえる。

給食会の約90%の人が、週に3, 4回以上、通院、買い物、地域活動参加目的で外出している。今後は後期高齢者の増加が予想されていることから、坂道が多いという地形上の不利は外出における今後の大きな課題であり、また、男性参加者が少ないことも今後の課題といえる。

次稿では、近所つきあい、子ども・親族とのつきあい、生計と心配事、緊急時の対応態勢についての分析・考察を行う。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、調査にご協力を頂きましたM独居老人給食会ボランティア及び会員の皆様と役員の方々、M地区民生委員、M地区自治会会長の方々に深く感謝いたします。また、訪問調査に協力いただいた鹿児島女子短期大学と鹿児島大学の学生、および小城百代助教に感謝いたします。

注

注1) 県内で最も高齢化率の高い市町村は南大隅町(43.3%)で、最も低い市町村は鹿児島市(21.2%)である。

注2) 本県の一般世帯の1世帯当たり人員は、平成17年の2.35人から平成22年2.27人と減少し、世帯そのものは小さくなっている。

注3) 南日本新聞、2011年10月8日:「町内会の加入率が最低」

注4) 「M独居老人給食会」はその長年の功績に対し、鹿児島市などから社会ボランティア賞、社会福祉功労者団体賞などが授与されている。

注5) 会の登録会員は54名だが、給食会に

は、会への理解を深めてもらい参加者への勧誘に繋がればと、毎回自治会長・町内会長などを来賓として招待、また、講演者・ボランティアも一緒に給食会に参加するため人数が増えている。

注6) 全国調査^{注7)}と比較すると、困っていることは「特にない」が64.7%で差がないが、「道路に段差・狭い・滑る」が11.2%に対し、調査対象地域では30.2%と高く、この地域では外出は容易ではないことを示している。

注7) 「平成22年度第7回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」、内閣府

150, 2001.12

- 8) 古川恵子・友清貴和：高齢者をとりまくコミュニティの実態（鹿児島県笠沙町の事例）その3—ひとり暮らしの高齢者の人的交流と生活行動—、日本建築学会九州支部研究報告、第40号、pp.77-84, 2001.3
- 9) 南日本新聞・2011.11.8「町内会の加入率が最低」「ひとりの時代—鹿児島で生きる」
- 10) 上野千鶴子：ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ—、太田出版、p.246, 2011.8

(平成24年1月4日 受理)

参考文献

- 1) 平成22年度国勢調査
- 2) 平成23年高齢社会白書
- 4) 寺川優美、田中紀之、三浦 研、寺川政司：豪雪・過疎地域における在宅高齢者の人的交流に関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.571, pp.69-76, 2003.9
- 5) 室崎千重、重村 力、山崎義人：一人暮らし高齢者の居住環境を支える近隣環境に関する研究、日本建築学会計画系論文集 No.631, pp.1907-1914, 2008.9
- 6) 古川恵子・友清貴和：高齢・過疎地域における高齢者の生活を支えるつきあいの広がりに関する研究、日本建築学会計画系論文集、No.568, pp.77-84, 2003.6
- 7) 古川恵子・友清貴和：農村地域の高齢者福祉を視野に入れた交際関係の分布、農村計画論文集 第3集, pp.145-

